

中国の日本語教育

—— 教科書を通してみる第二外国語教育 ——

秦 耕 司

0・0 中国は、外国語教育が最も成功している国の一つであると言ってよい。中国に行ったことのある人であれば誰でも経験するように、専門課程であると否とを問わず、日本語を学習している中国人学生たちは、我々日本人を見かけると、誰でも積極的に話しかけてくる。少々日本語が不自由でも、多少文法が間違っている、なんら臆することなく話しかけてくる中国人に驚くのは、私たちが均しく経験するところである。今回の中国出張（2000年8月）は、中国における日本語教育、特に第二外国語の教育面における実態を視察するためであった。そしてそのような視察を行った目的は、日本の第二外国語における中国語教育、特に教科書のあり方に何等かの指針を持ち帰ることができないかと思ったことによる。

外国語の学習は「1に教科書、2に教師、3に辞書」と言われているように、教科書の果たす役割は非常に大きい。にもかかわらず、現在日本における第二外国語用の中国語初級教科書の出版状況には、暗澹たるものがある。最初に1例を上げ、中国語教育界の現状を見ておこう。

0・1 かつて筆者は、ある大学から非常勤講師の依頼があった時、1年間という約束で引き受けたことがある。2年生クラスを担当するので、教材を選定する関係上、そのクラスが1年時に用いた教科書を取り寄せて見たところ、その教科書

には、何をどのように教えるために作成したのか、その著者たちの意図するところが全く見えないのであった。複数の中国人による編集だから、中国語そのものは正しくて間違いはないであろう。多分。しかしそこに提示されているものは、本文にしる文法事項、文法用例にしる、中国語とはどのような言語で、どのように学べばよいのか、その視点が全くと言っていいほど欠けているのである。中国人が作った中国文であるから、外国人を対象とした中国語教育に携わったことのない中国人が見れば、あるいは「この中国語は私たちがふだん話す中国語そのものです。」と言うかも知れない。しかし教科書に提示されるべき中国文は、それだけでは一概に相応しいと言うことはできないのである。加えて分量が少なく、内容的にも乏しい文章なので、あまり基礎力がついていないことは、容易に想像できる。であるから、このクラスですぐに2年生用の教材を用いるには無理がある。しかし新たに初級用の教科書を買わせるのは、経済的にも時間的にも二重の負担になるので、それを強要する訳にはいかぬ。それで暫くは、その教科書の未学習の部分を用いて授業を進めざるを得なかった。そして、その教科書を用いて授業をしている時に、常に気持ちとしてあったのは、他の教科書を使用すればもっと確実に力がつくのであるが、というもどかしさであった。

このクラスが1年間でどの程度の力がついているのか知るために、最初の時間に学生たちに、その教科書の好きな課の本文を音読させてみた。読みはまずまずであったと言ってよい。中国語は発音が難しいので、一度習ったところでも上手に読めるとは限らないからである（ただし、現状はそうであるが、この件に関しては、従来と異なったタイプの教科書、たとえば本文からピンインを取り去った教科書等で検証してみなければならない。発音が難しいとは、発音そのものが難しい場合と、発音教育もしくは発音学習の方法が効果的になされていない場合の双方があるからである）。ところが授業が終わってから数名の学生がやって来て、「私たちは1年間中国語を学びましたが、何も力はありません。発音からやり直して下さい。」と言うのであった。

0・2 その教科書の欠点は多々あるが、たとえば“把”構文について言えば、ただ“把”を用いた例文が提示されているだけで、その用例を用いて“把”構文の特徴を説明することができないから、文法事項として設ける意味がないのである。

またせっかくその教科書を使用するのであるから、せめて教えたことは少しでも定着させようと、毎回書き取りの小テストを実施したのであるが、本文にしる文法用例にしる、生産性を考えて作られていないから、書き取り用の単文を作ることができないのである。そんな訳で、その教科書からは、いくら先に進んでも、単に語彙数を増やすだけの意味しか見出すことはできなかつたのである。

これはほんの1例に過ぎない。決してこの教科書だけが特殊な例外なのではないのである。中には発音説明にしる、文法説明にしる、ほとんど毎

ページに渡って数カ所の間違ひがある教科書さえ珍しくなくなりつつあるのが現実である。暗澹たる思いに心痛しているのは、決して筆者だけではないであろう。

0・3 話がつい中国語教育にそれた感があるが、中国語学者の間では夙に指摘されていながら、まだ一般に広く中国語教育者の間にはもちろん、中国語の教科書を作成する人の間にさえ認識されていないことであるので、現実の問題として、先ず最初にこのような中国語教育界の現状を承知しておくべく、敢えて蛇足の筆を執った次第である。

従って今回のような視察は、本来個人が行うよりも、しかるべく団体を組織して実施する性格のものである。しかしこれは本学の中国語教育に対しても、早急に大きく係ってくる面も小さくはない。敢えて踏みきったのはそのためである。

1・0 中国において外国語教育がうまく効果を上げている原因は、時間数が多い、クラス当たりの学生数が少ない（15～20名）、学生が意欲的である（神経が授業に集中しており、教室に張り詰めた雰囲気がある）等、いくつかの要因が考えられるが、小論では教科書の問題を取り上げることにはしたい。時間数は語学力と比例するから、当然重要である。クラス当たりの人数を減らすのは、教師の立場からの指導効果が高まるというだけでなく、学生の中に緊張感が出て学習意欲が高まるという、より大切な効果も上がるので、教育条件としては、ある意味では時間数以上に重要である。

しかし、これらの問題は、担当教員個人の立場を超えた、大学全体の問題であるので、今は取り上げないこととする。それら外的な条件が如何なる形であれ、教科書はより根本的な位置づけがなされるべき性質のものであろう。教科書如何では、

中国の日本語教育

これら外的要因を、生かすことも殺すこともできるからである。

1・1 日本では、毎年おびただしいと形容してもおかしくないほどの中国語の教科書が出版されている（今年度出版社から筆者のところに送られて来た中国語教科書だけでも40冊、その内初級用は27冊である）が、極めて少数の良識的なものを除けば、教科書の名に値しないものも多く、たとえ良心的なものであっても、その内容やレベルを見れば、大学の第二外国語の教室で使用できるか否かは、また別の問題である。

一方中国では、出版されている日本語の教科書は数えるほどしかなく、これらはみな長年に亘って使用されている。しかも第二外国語とはいえ、文法、語彙の規範が設けられており、教科書はこれに基づいて編集されている。しかも編集者も、中国人、日本人ともに数名から成り、その出来具合から見ても、相当研究と議論が重ねられていることが窺える。本報告は、民間で編集出版されている教科書の中から、大学で最も広く使用されていると思われるものを取り上げ、その編集方針や内容、構成等いろいろな角度から見ていこうと思う。

1・2 ここで取り上げる教科書は、初級と中級それぞれ2冊から成る次の4冊本である。

『日中交流 標準日本語』初級上、下

『日中交流 標準日本語』中級上、下
初級、中級はそれぞれ構成は同じであるが、最初に輪郭を示しておく。

『日中交流 標準日本語』初級上

範囲：第1課～第25課

基本句型：24組（74個）

基本語彙：約800語

構成：全体を6単元に分け、4課を1単元とする。本文は24課まで、

第25課はテスト問題。総ページ数407頁。

学習時間：1課6時間。計150時間。

『日中交流 標準日本語』初級下

範囲：第26課～第50課

基本句型：24組（77個）

基本語彙：約900語

構成：全体を6単元に分け、4課を1単元とする。本文は49課まで、

第50課はテスト問題。総ページ数432頁。

学習時間：1課6時間。計150時間。

『日中交流 標準日本語』中級上

範囲：第1課～第20課 総ページ416頁

基本句型：160組

基本語彙：約1,290語

学習時間：1課6～7時間。計150時間。

『日中交流 標準日本語』中級下

範囲：第21課～第40課 総ページ448頁

基本句型：110組

基本語彙：約1,740語

学習時間：1課6～7時間。計150時間。

日本では、第二外国語は週2回4時間、年120時間がふつうである。『日中交流 標準日本語』は、「上」だけでも150時間で、日本よりは30時間、すなわち15回分多い計算になる。それだけではない。中国の1時間は50分であるから、1回につき10分の開きがある。初級語学の授業にとって、この10分の差は余りにも大きい。たとえば授業が丁度くぎりのよい処で終って、終了時間まで後3分あるとする。3分あれば本文の音読ができる。この最後の3分で、音読ができるのとできないのでは、

大きな違いがある。10分の違いが如何に大きいか解ると思う。このことを認識している語学教育者が果たしてどれだけいるであろうか。

そんな訳であるから、時間数の違いからすれば、このままの形で語彙数や文法事項を比較するのは不適切であるが、教科書は、文法事項を段階を追って系統的に提示していく構造シラバスと、関連ある場面で効率よく運用力を身につけていく場面シラバスを考慮に入れ、有機的に関連付けながら構成してあるので、時間数はしばらくおき、『日中交流 標準日本語 初級上』に焦点を絞って、その有効性と効率性を見ていこうと思う。

1・3 最初に第1単元、特に第1課を詳しく見ることにする。課ごとのテーマは次の通りである。

第1単元

第1課 わたしは田中です。

第2課 これは本です。

第3課 ここは学校です。

第4課 昨日は6月29日でした。

この目次からも解るように、第一単元は「～は…である」を基本型とし、主語および述語に課ごとに違いをもたせ、この句型を用いて幅広い運用力がつくように配慮されている。それでは基本型「～は…である」をどのように膨らみをもたせてあるのか、詳しく見ることにしよう。

1・4 第1課 わたしは田中です。

第1課のポイントとしては、次の4点が示されている。

- | | |
|----|-----------------|
| 重点 | 1. ～は～です |
| | 2. ～は～ではありません |
| | 3. ～は～ですか |
| | 4. ～は～の～です (所属) |

第1課では「～は…です」の基本型の上に、肯定文、否定文、疑問文それに所属を表す助詞「の」を用いた文が提示されている。外国語教育の大切な点は、単に文法理解のための句型を提示するだけでなく、如何にその外国語を再生できる力を養成するかにある。再生するための条件は、語彙数と文法事項の多少と課全体の構成の仕方である。語彙数や文法事項が少なれば応用力はつかないが、多ければ逆に負担が大きくなって消化不良に陥ってしまう。ここで大切なことは、単に語彙数や文法事項の多少に焦点を当てるのではなく、この課で出ている文法事項や単語を如何に覚えやすく、運用しやすい形で提供するかにある。覚えやすく、運用しやすい形で提供すれば、文法事項にしろ、語彙にしろ、それだけ多く出すことが可能になってくる。要は、一つの課全体をどのように構成するかが重要なポイントである。ここで1課全体の構成を第1課で眺めておこう。

(1)

わたしは 田中です。

田中さんは 日本人です。

田中さんは 会社員です。

(2)

わたしは 王です。

王さんは 日本人ではありません。

王さんは 中国人です。

王さんは 会社員ではありません。

王さんは 学生です。

王さんは 東京大学の 留学生です。

中国の日本語教育

(3)

田中：初めまして。

王：初めまして。

わたしは 王です。

田中：わたしは 田中です。

王：田中さんは 会社員ですか。

田中：はい、そうです。会社員です。

旅行社の 社員です。

あなたは 会社員ですか。

王：いいえ、そうでは ありません。

学生です。東京大学の 留学生です。

(1) と (2) は用例提示用の単文で、(3) は (1) と (2) を基に構成された会話文である。会話文よりも用例を先に提示することによって、会話文の理解が容易になるが、この (1) (2) の用例提示の長所はそれだけではない。次にいくつか上げてみよう。

1. 1句型につき1用例ではなく、主語や述語を入れ替えて数例が提示されているので、理解しやすく覚えやすい。
2. これら数例の例文は、内容的にまとまっているので覚えやすい。
3. 用例を提示する順番が、文の流れとして自然で無理がないように工夫されている。
4. 行書きにしているのが、文構造が把握しやすく、構造シラバスと場面シラバスがうまく噛み合っている。
5. 用例は、会話だけでなく、日本語で文章を作る場合にも使える文体である。
6. 文法説明をする前に、解りやすい形で用例が示されてあるので、想像力や類推力を高め

ることができる。このことは、外国語を学ぶ上で非常に大切なことである。

教科書を作成する場合に大切なことは、本文はもちろんであるが、どのような例文をどのような順で提示するかが非常に重要である。用例の出し方如何では、文法説明はその例文群の中にかかなりの程度なされているとあってよい。内容的に解りやすい(従って、訳しやすい)だけでなく、文法を理解する上においても解りやすい例文を提供することは、教科書作成上重要なポイントである。この点中国語教科書の例文は、例文は文法説明のためのそれであって、運用力を養うにはほとんど意味のないものが少なくない。当該外国語を再生産する能力を養成することを目的として編集するならば、用例は本文と同等の、否、ある意味では本文以上に重要な役割を担わすことになるということも決して過言ではない。この点に関して教科書の編集者をもっと留意すべきであろう。

1・5 次に、文法説明の部分は怎么样了なのであろうか。次の例を見れば一目瞭然であるが、ここにも「解りやすい」「運用能力の養成」という視点が貫かれている。

句型、文法解説

- 1 甲は 乙です この句型は中国語の「甲是乙」に相当する。

甲(名詞)	は	乙(名詞)	です
わたし	は	田中	です
わたし	は	会社員	です
王さん	は	中国人	です
王さん	は	留学生	です
田中さん	は	会社員	です

- 2 甲は 乙では ありません この句型は

中国語の「甲不是乙」に相当する。「です」の否定形は「ではありません」

甲 (名詞)	は	乙 (名詞)	では	ありません
わたし	は	田中	では	ありません
わたし	は	学生	では	ありません
王さん	は	会社員	では	ありません
王さん	は	日本人	では	ありません
田中さん	は	学生	では	ありません

3 甲は 乙ですか 中国語の「甲是乙吗」に相当。文末に疑問の助詞「か」を用いる。「か」は“吗”に似た働きをする。

甲 (名詞)	は	乙 (名詞)	ですか
あなた	は	王さん	ですか
田中さん	は	会社員	ですか
王さん	は	留学生	ですか

4 甲の 乙 助詞「の」は、名詞と名詞を結ぶ。二つの名詞はさまざまな関係があるが、ここでは所属関係を表す「的」に相当する。

	甲 (名詞)	の	乙 (名詞)	です
田中さんは	旅行社	の	社員	です
王さんは	東京大学	の	留学生	です

5 “はい”と“いいえ”

・あなたは 王さんですか。

はい、わたしは 王です。

・王さんは 会社員ですか。

いいえ、わたしは 会社員では ありません。学生です。

②疑問文と重複するものがあれば、重複を避けるために「そう」を用いる。

・あなたは 王さんですか。

はい、そうです。

(わたしは 王)

・王さんは 会社員ですか。

いいえ、そうでは ありません。

(わたしは 会社員)

1は肯定文、2はその否定文、3は「か」を加えた疑問文、4は述語に所属関係を表す「の」を用いた文、5は3の疑問文に対する答え方の文である。

注目すべき点がいくつかある。ふつう文法解説用の例文は、1例かせいぜい2例である。しかしここでは内容的に不自然でない限り、と言うより、内容的に不自然にならないように、既出の単語を可能な限り沢山用いて例文が提示されている。たとえば1で

王さんは 留学生です。

田中さんは 会社員です。

とすれば、従来の教科書では、その否定形を示す場合、

王さんは 留学生では ありません。

田中さんは 会社員では ありません。

としても、それが文法用例である限り、教師にも学習者にも、何ら疑問に思われることなく受け入れられていた。しかしこの教科書では、たとえ文法用例であっても、内容的に一貫性を持たせて矛盾が生じることなく、

王さんは 会社員では ありません。

田中さんは 留学生では ありません。

としている。我々人間が考える動物である以上、この方が解りやすく、すんなりと覚えらるであろう。特に例文を記憶するのであれば、文法用例としてのみ記憶するより、内容と一体となった形で覚えた方が覚えやすいし、再生もしやすいのは

中国の日本語教育

当然である。一見どうでもよいようなことであるが、ことばが内容を持ち、その伝達を目的とした道具であるとするなら、単に単語を機械的に入れ換えて練習をするよりも、内容の整合性までを考慮に入れて例文を提供する方が、良心的でもあるし効果はより大きいであろう。個々の例文の内容的にまで一貫性を持たせることは、いたずらに混乱を起こすことを避け、理解を容易にし覚えやすくする上で大切なことである。このことは初心者にとっては我々教師が考える以上に、影響は大きいと思われる。単語は単に単語として覚えるよりも、例文の中で覚えた方が覚えやすいのと同様、例文も個々の例文としてよりも、整合性、一貫性のある内容で統一された例文の方が覚えやすいことは明らかである。

語学学習用の教科書は文法書ではない。その語学力を養成するための手段書である。例文がいかに大事であるか、教科書の編者をもっと細かな点にまで配慮すべきであろう。日本で出版されている中国語教科書の多くが、その「まえがき」にある目標とは裏腹に、語学力を養成するように構成されていないのは、悲しむべきことである。

文法用例は、本文と同じものを提示したのでは意味がない。しかし全く違った内容の例文でも、文法理解には役に立つとしても、生産性の視点からすれば、断片的な知識で終るので、それもあまり意味のあることとは言えない。とは言え、限られた句型や語彙数の中で、関連ある内容の用例を作るのは、決して容易なことではない。内容的に関連のない用例を提供するのはやむを得ないとしても、少なくとも内容的に同じレベルの、つまり学生を対象とした教科書なら、学生の日常生活が内容となっている用例を提供すべきであろう。語

学教科書の用例は、文法理解と生産性の双方から提供されるべきである。

1・5 次に単語を見ることにする。第1課に出てくる単語は、単語の定義は別として、本文の後に初学者に解りやすい形で一覧表が設けられているが、それに従えば23語、他に練習問題に5語、計28語である。6時間で学ぶ量としてはやや少ない感じがするが、1年間全体の時間数が多いので「上」全部では800語と多く、ただ学習したというだけでなく、使用語彙として確実に身につける量としては、むしろ適量と言えるかも知れない。

時間数の多少は、時間数を増やせば単に語彙数や文法事項を増やすことができると言うだけではない。学んだことを確実に身につける上でも必要なことである。現在日本では卒業要件単位が削減される傾向にあるが、そのような現状にあればこそ、単に単位数を云々するだけでなく、大学全体のカリキュラムの中で語学教育をどのように位置づけするのか、もう少し到達レベルや内容にまで踏み込んで考えるべきである。必修だけでなく選択までも含めて到達目標を設定しなければ、単に個々の教員が個別に単独で授業をするだけに終わってしまうであろう。

話しが少しそれたが、第1課に出てくる単語は次の通りである。

わたし、あなた、学生、留学生、東京大学、社員、会社員、旅行社、日本、中国、人、田中、王、～は、～です、～ではありません、の、か、さん、はい、いいえ、そう、はじめまして

会社員、旅行社等第1課にしては難しい単語がいくつかある。最初からいきなり音節数が多かったり、発音しにくい単語を出すのは、一般的に言ってももちろん適当ではない。しかし課の全体構成を見ると、この教科書の著者たちもこの点に関して十分心得ていると思われ、難しい単語に対して少しでも抵抗感を少なくしようとの工夫が施されている。この点を正しく認識すれば、このような単語を用いたことについても、一方では仕方のない面もあるが、また一方ではある程度の必然性も理解できるのである。

では筆者たちが施しているその工夫とは何であるか。まずこれら単語の頻度を見よう。左の数字は本文中に用いられている回数、右の数字は文法解説の用例として用いられている回数である。

わたし	4-10	田中	5-7
あなた	1-5	王	7-14
学生	2-8	～は	13-30
留学生	2-3	～です	14-27
東京大学	2-1	～ではありません	3-10
社員	1-1	の	3-2
会社員	5-9	か	2-10
旅行社	1-1	さん	8-13
日本	2-2	はい	1-2
中国	1-2	いいえ	1-2
人	3-4	そう	2-2
		はじめまして	2-0

この数字から次のことが解る。

1. 同じ単語が繰り返し用いられている。
2. ほとんどの単語が本文よりも用例文の方に用いられた回数が多い。

3. つまり文法用例は、本文以上に用例数が多いのである。

如何であろうか。わずか4句型を用いて、これだけ繰り返し単語を用いれば、句型や単語は、音読をするだけで頭の中になんかなり定着すると言わねばならぬ。新しい外国語を学ぶ場合、その外国語を再生産するだけの力を養成しなければ学ぶ意味はあまりないであろう。再生産できる力を養成するのはもちろん本人の努力は大事であるが、教える立場に立って見れば、より効率よく教えることが大切であろう。効率がよいということは、無駄がないことであるが、無駄がないとは、新しい文法説明用の用例であれば、提示すべき用例は最大公約数的な数で十分であるが、新しく学習した文法事項を用いた文を使用できるように身につけるためには、最小公倍数的な数の用例が、学習者にとっては無駄なく最大限の内容を持つ用例を学ぶことになる。これは、基礎段階の教科書にとって最も重要な点であると言っても、決して過言ではない。この点に関して、我々はずっと真面目に中国の教科書に見習う必要があると思われる。特に中国語は、文字が非表音文字であるから、漢字の発音習得に効果があるばかりでなく、単語と単語を並べるだけで両者間に意味関係が生じるような言語であるので、同類の例文をたくさん提供することは、他の言語以上に必要性も高いし、有益で効果も大きい。何をおいてもまず真っ先に中国語の教科書に取り入れるべき点であると思う。

1・6 各課の仕上げとしてある練習問題は、その課で学習したことを消化、定着させる意味において、またできれば応用力をつける意味において大切である。第1課の練習問題を見よう。

練習 I

①例を参考にして、下線部の語句の入れ替え練習をなさい。

<例1> (わたしは) 王です。

- (1)中国人 (2)学生 (3)留学生
(4)会社員 (5)東京大学の 留学生

<例2> 田中さんは 日本人です。

- (1)王さん・中国人
(2)田中さん・会社員
(3)山下さん・学生
(4)スミスさん・アメリカ人
(5)田中さん・旅行社の 社員

②例を参考にして下線部の語句を入れ替え、会話の練習をなさい。

<例1> 甲：(あなたは) 王さんですか。
乙：はい、王です。

- (1)田中 (2)スミス

<例2> 問：あなたは 日本人ですか。

肯定回答：はい、日本人です。

否定回答：いいえ、日本人では ありません。

- (1)アメリカ人 (2)会社員
(3)学生 (4)東京大学の 学生

<例3> 問：田中さんは 会社員ですか。

肯定回答：はい、会社員です。

否定回答：いいえ、会社員では ありません。

- (1)スミス・学生
(2)田中・旅行社の 社員
(3)王・東京大学の 留学生

1>は述語、<例2>は主語と述語の2語の入れ換えであり、②は会話文で質問文とそれに対する肯定の答、否定の答であるが、いずれも主語と述語の入れ換えである。

中国で編集出版されている教科書は日本語に限らず、外国人用の中国語教科書もそうであるが、この入れ換え練習が好んで使われている。筆者の考えを述べれば、日本語や中国語においてこのような単語を入れ替える練習はあまり意味があるとは思えない。なぜなら、たとえば英語のように、主語が単数か複数か、女性か男性か等によって人称代詞が変わったり動詞が変わる言語では、指定された単語を入れ替えることにより、それと連動して他の単語にも変化が生じるから、口頭練習はむしろ初期の段階で必要である。ところが中国語や日本語は、機械的に単語を入れ替えるだけですむので、わざわざ練習としてページを割く意味があるとは思われない。

ただ日本語については一つだけ保留しておく点がある。それは中国語の文字が漢字という表意文字であるのに対し、日本語のそれはかなという表音文字であるという点である。つまり中国語の場合、漢字が非表音文字であるため、初級の段階ではもちろん、中級段階においても音読をする時は、発音に神経が集中して、意味にまで頭が回らないという不便さがある。従って、機械的ではあるがと言おうか、機械的であるが故にと言おうか、このような入れ換え練習にはそれほどの意味は見出すことはできないのである。むしろ完成された文を並べて音読の方が文構造の理解には有益である。(この点に関しては、今一つの理由があるが、中国語の問題であるので今は言及しないことにする。)

練習 I は単語の入れ換え練習である。①の<例

一方日本語は表音文字であるため、発音にはそれほど神経を奪われずに音読することができる。とすれば、その分音読をしながら意味を考える余地が大きくなる。従って文法的に同類の単文がこれほど多く提供されていれば、音読することで発音に慣れ意味を覚えるだけでなく、入れ換えをすることによって句型まで習得するのにかなり有用であろう。練習の指示文に「入れ換え」とあるので、我々はいずれ入れ換えの単語に目を奪われてしまいが、句型の骨格として「～は…です」があり、その中に単語を当てはめていくわけであるから、単語がどれだけ取り替えられても「～は…です」は変わることなく用いられるのである。この骨格に視点を当ててみれば事実はまるで逆で、文型習得のための練習問題であることがはっきりと認知できるのである。

この句型は中国語では動詞“是”一語で表すから、中国語を母語にしている人にとっては、構成が①<例1>で「…です」、<例2>で「～は…です」と順を追って習得できるように配慮されているので解りやすく、抵抗感もない。とすれば、この一見機械的とも思える入れ換え練習ではあるが、これはこの句型が、自然にかつ十分に身につくように周到な配慮を持って作成されていると見て差し支えないと思われる。練習が音読用に作成されているということは、その課で学んだことを単に確認整理するだけでなく、確実に身につけるのを目的とした方針であろう。読解力に重点を置いた知的理解に止まることなく、実用面を重視した運用力養成のためには、このような練習こそ必要なことである。

このように見れば、次の②で初めて否定の形が出てくるのも理解できる。しかも<例1>では肯

定だけの答、<例2>において肯定と否定の答が用意されているのである。そして<例3>ではもう一度「～は…です」を意識するように提示すると同時に、否定の形の「～は…ではありません」をセットで提示している。そして、このような同類の用例が数多くあるパターン練習のところに、新しい単語を取り入れて用例を増やすことは、その単語が覚えやすいというだけでなく、この句型を用いた応用力を身につける基礎条件として、この句型を定着させ自由に用いることができるようにさせる上で効果があるのである。不必要と思われるほどに細かな点にまで配慮が施されている構成に、学習者は新しい文法事項を習得するのに、それほど抵抗感もなく学ぶことができよう。文法面にのみ焦点を当てたような例文が多い中国語教科書の現状を顧みれば、この点は、中国語教科書を編修する場合に大いに参考にすべきであろう。

この教科書を初めて手にした時、本文を見ただけで「よくできている」と直感したのであるが、全体に目を通してよく検討してみると、本文のみならず、文法用例の提示の仕方から練習問題に至るまで、十分かつ細心な配慮が施されていることが明白となってくるのである。第1課といえば、学んだ単語も文法事項もほんのわずかである。このような大きな制約の基でこれだけの量の例文が提供できるということは、編者たちの並々ならぬ意欲があって初めてできることである。

以上見ただけでも、教科書は母語とその言語双方に通じ、なお専門に誠意を持った人によって編集されなくては、優れたものはいできないことが解ると思う。私たちが日本人であるからといって、日本語の教科書を作成できないのと同様、中国人だからといって中国語の教科書が編集できると思

中国の日本語教育

うのは、あまりにも学習者を軽視した考えであると言わねばならぬ。

と思う。答も必然的に「はい」か「いいえ」が出てくるような内容にすればいいだろう。例を挙げておこう。

練習Ⅱ

①下の答を導き出す疑問文となるように、括弧のなかに適当な語句を入れなさい。

(1)あなたは () ですか。

はい、田中です。

(2)スミスさんは () ですか。

いいえ、学生では ありません。

②括弧のなかに適当なひらかなを入れなさい。

(1)山下さん () 日本人です。

(2)スミスさんは 会社員です () 。

はい、会社員です。

王さんは 東京大学 () 留学生です。

③次の文を日本語に訳しなさい。

注：原文は中国語。ここには訳出した後の日本語を記す。

(1)初めまして、わたしは王です。

(2)田中さんは 学生では ありません、旅行社の 社員です。

練習Ⅱの①は、答の文を見て質問文の空欄を埋める簡単なクイズのような問題であるが、少なくとも筆者には、このような練習形式に語学的な意味を見出すことはできない。ここは質問と回答からなる会話文であるから、これを生かすとすれば、機械的に名詞を入れるだけの問題ではなく、「田中」「学生」を与えて、質問と答に必然性のある部分を空欄として、「ですか」「です」、「ですか」「ではありません」を入れさせる問題の方がよい

例 王さん、あなたは 中国人ですか。

_____, わたしは 中国人 _____。

田中さん、あなたは 中国人ですか。

_____, わたしは 中国人 _____。

わたしは 日本人 _____。

王さん、あなたは 日本人ですか。

_____, わたしは 日本人 _____。

わたしは 中国人 _____。

田中さん、あなたは 日本人ですか。

_____, わたしは 日本人 _____。

②は助詞1語を入れる最も基本的な問題であるから、量を多くして練習①の最初に置いた方がよいのではないだろうか。最初に最も基本的なことを取り上げ、段階を踏みながら次の練習に移っていくのが理解をするのに便利である。現にこの問題を冒頭に置けば、今の①にうまく流れていくであろう。

③は日本語訳の問題で、疑問文を除いた重点項目を一通り1回出す形になっている。書いて訳す作業は、文法事項等を確認する上で有益である。従ってこの訳の練習は、最後に置くよりも基本的な個々の問題の後にする方が、新しい文法事項等を確実に習得した上で口頭練習に入ることになるので、効果もより大きいと思われる。これまでの教科書は、ほとんど全てこの訳の問題は最後に置かれていた。今後教科書のあり方について、この点について一度議論し検討する価値は十分あると思う。

1・7 以上第1課を見ただけでも、この教科書は日本語を身につける教科書として、全体構成が用意周到な計算によって作成されていることが理解できよう。自然に、解りやすく、単語も文型も覚えやすく、運用力が身につくように構成されている。当たり前と言えば当たり前であるが、日本で市販されている中国語の教科書にはまだ見られない方針であり、構成である。

近年日本でも徹底して聞く力を養成させようと、「学習者に学習過程を意識させずに」学習させる方針のもとに編集された教科書が出版されている。しかしその学習方法は、録音を聞いて発音されたものをいくつかの選択肢のなかから選ぶという、発音練習としては全く無意味な形式が取られているばかりでなく、その選択肢も例えば、

- (1) b d (2) z f (3) g t (4) n b (5) m k ……
 (1) m, f, d (2) b, k, l (3) b, g, t (4) n, d, f
 (5) m, t, k ……

のように、中国語を知らなくても、ローマ字さえ知っていれば誰でも正解が出るような問題がずらりと並んでいるのである。文の問題にしても、与えられた問題文は次の如くである。

1. 我 [姓 叫] 王。
2. 她 [姓 叫] 鈴木。
3. 你 [姓 叫] 什么 名字?
6. [我 你] 不是 学生。
7. 刘京 不是 [老师 学生]。
9. 山田 是 [谁 什么] ?

6, 7以外は、別に録音を聞かなくとも、授業に出席さえしていれば、正解は簡単に解る問題ばかり

りである。文字が与えられてある以上、何もわざわざ聴き取りの問題にする意味など全くない。たとえこの文を見ただけで正解が解らない学習者がいたとして (ちょっと考えられないのであるが)、録音を聞いて正しく正解を出したからといって、それにどのような意味があるのだろうか。6, 7も含めて、正解を間違えるとはとても考えられるような問題内容ではない。

「まえがき」には「3年かかって編集した(初版本)」こと、「『いつのまにかできるようになった』という錯覚に似たものを起こさせる」と書いてあるので、拙速であったこと、および力がついていないのについたと錯覚するように構成されていると、正直に話しているのだから、それはそれでいいというわけにもいかない重要な問題を含んでいる。

1・8 練習問題は、単にその課で学習したことを確認する意味あいだけでは不十分である。基本的な事項と総合的知識、それらを如何に有機的に組み合せて全体を構成するか、それが重要である。練習問題のあり方は、先ず基礎力を身につけ、更に応用力を養う基礎となるように構成されてこそ、課の締めくくりとしての役割が果たされるのである。

2・0 第1課でかなり詳しく見たので、第2課以降は輪郭だけ見ていくことにする。第2課と第3課には、指示代詞が出ている。本文の文を図式化して見よう。

第2課 これは本です。

- 重点 1. これ/それ/あれは ~です
 2. この/その/あの ~は ~です
 3. ~は ~の ~です (内容及び其

中国の日本語教育

の他)

(1)

これは～(何々)です。 本

これは～(何々)では ありません。 雑誌

それは～(誰々)の～(何々)です。

王さん, 万年筆

それは～(誰々)の～(何々)では ありません。

わたし, 万年筆

あれは(何々)の～(何々)です。

中国語, 辞書

あれは(何々)の～(何々)では ありません。

日本語, 辞書

(2)

この～(何々)は日本の～(何々)です。

新聞, 新聞

それは日本の～(何々)です。 新聞

その～(何々)は科学の～(何々)ですか。

本, 本

これは～(何々)の～(何々)では ありません。

歴史, 本

一見三つの指示代詞を加えただけのようであるが、この指示代詞の違いが解るような配慮がなされている。中国語の指示詞は「こ」と「あ」の2分法であるから、聞き手に焦点を当てた「そ」がない。そこでこの教科書は「こ」と「そ」と「あ」の違いが理解できるように、用例の横にそれぞれ話して、聞き手、対象物の三者の位置関係が解るような挿し絵が添えてある。そして更に練習でも2ヶ所、今度は1枚の絵の中で「こ」「そ」「あ」が区別できるような絵が添えてある。この教科書には、第2課に限らず第1課から全ての課に、言語表現上もしくは内容理解のための挿し絵や写真

が添付されているが、課によっては絵を基に、その絵に沿った形で本文が作成されているところもある。このように教科書全体が日本語習得に向けて焦点を当て、細かなところまで行き届いた配慮がなされているのである。

(3)は第1課同様、(1)(2)の基礎の上に会話が展開されていて、学びやすい内容になっている。

2・1 第3課 ここは 学校です。

重点 1 ここ/そこ/あそこは ～です

2 ～は ここ/そこ/あそこです

3 ～は ～ですか、～ですか

4 ～も ～です

(1) ここは ～(何々)です。 学校

ここは ～(誰々)の ～(何々)です。

王さん, 学校

そこは ～(何々)です。 教室

そこは ～(何々)の ～(何々)です。

日本語, 教室

あそこは ～(何々)です。 体育館

(2) ～(何々)は ここです。 郵便局

～(何々)は そこです。 映画館

～(何々)は あそこです。 駅

～(何々)は どこですか。 デパート

～(何々)は あそこです。 デパート

～(何々)は ～(何々)の 前です。

デパート, 駅

(3)はこれまでとはがらりと趣を変えている。内容はデパート内での買い物で、客と店員との会話。単に商品名と値段に終始せず、「～は～です」の句型を用いて売り場を尋ねるなどの工夫が見られる。1課当りの新単語も31語と第2課より10語

増やし、表現が豊富になっている。しかし難易度から見れば、表現が豊富になっている割には難しくなったという抵抗感は少ない。「いらっしやいませ。」「～はいくらですか。」「～を下さい。」「ありがとうございます。」「どうもありがとう。」は文法とは関係のない常用表現。新しい単語は、ワイシャツ（2回）、靴（2）、かばん（2）、売り場（3）、隣（1）と、2回は用いるように工夫されているばかりでなく、同類表現が繰り返されているので、学習者は抵抗感を感じるよりもむしろ今までのパターン練習から脱して広々と視界の広がる場に出て、いよいよこれから現場の日本語を学ぶのだという気持ちが起こって来るように設定されているように思われる。

ここを学ぶのは、日本の授業時間に換算すれば、本文に入ってから7回目に当たる。基礎的なパターン練習を十分に時間をかけて行った後になるので、学習者もある程度はこのような内容のある会話文に飢えを感じ始めた頃にもなると思われる。第4課以降を見ても解るように、この教科書は、ここから内容的に変化に富んだ会話文に発展していくのである。

2・2 第1単元の最後に位置する第4課はどうなっているだろうか。ここでは「～は～です」の過去の言い方「～は～でした」と、その否定の形を日付、曜日用いた例文を用い、時刻表現を取り入れている。この発展にも無理のない形が工夫されている。

第4課 昨日は6月29日でした。

重点 1 ～は ～でした

／では ありませんでした

2 ～時に …ます（動詞）

3 ～時から ～時まで …ます

4 …ます／ません

(1)

昨日は *月*日でした。

今日は *月*日です。

明日は *月*日です。

今日は *曜日です。

明日は *曜日です。

昨日は *曜日でした。

昨日は *曜日では ありませんでした。

(2)

これは ～（何々）です。

今 何時ですか。

午前*時*分です。

田中さんは ～（いついつ）に 起きます。

田中さんの 会社は ～（いついつ）に 始ります。

田中さんの 会社は ～（いついつ）に 終わります。

田中さんは ～（何時）から ～（何時）まで 働きます。

田中さんは ～（何曜日）から ～（何曜日）まで 働きます。

明日は 土曜日です。

明日は 田中さんは 働きません。

(3) は朝バス停（挿し絵で表示）での王さんと田中さんの会話。「おはようございます。」で始まり、バスの時間を尋ねた後、(1)(2)を基にした会話が続き、最後に夏休みが「いつからいつまで」と発展させて終わっている。無理のない程度に変化を持たせているのがよく解る。

3・0 語学の教科書は、最初の3課を見れば

その出来具合が解ると言われている。この教科書は1単元4課で構成されているので、最初の4課でこの教科書全体の方針や構成状況を判断するのに不都合はないであろう。ここで今までに見てきたことをもう一度整理してみようと思う。

1. 本文を3部に分け、(1)と(2)で文法事項の用例を本文の形で提示し、(3)でまとめた内容を持つ会話文としている。
 2. (1)(2)も単に用例の羅列をしているのではなく、内容的にも自然な流れを持たせている。これは文構造を理解し身につけるのにも、単語を記憶するのにも便利である。
 3. (3)には文法用例の文だけでなく、「こんにちは。おはよう。ありがとう。」等日頃よく使う常用表現がほどよく取り入れられている。
 4. 文法解説の欄も、単に解説用として例文を提示するのではなく、既習の単語をなるべく沢山、かつ繰り返し用いて、本文同等の練習を兼ねられるくらいの例文が提供されている。これは単に文法事項を理解するに止まるのではなく、さらに徹底して運用力を養うための配慮である。
 5. 練習問題を単に「練習」としてあるところからも解るように、「問題」を解く形式ではなく、その課で学んだ文法事項や単語を、よりいっそう自由に使いこなせるような形で構成されている。
 6. 第1課から第4課までの進み方は、文法事項の取り入れに無理がなく、難しいという抵抗感を与えないように徐々に発展させてある。
- 3・1 以上述べてきた数点は、当然と言えば

当然と言えるかも知れない。しかし現在日本で市販されている中国語の教科書に、これらの点が全部揃っているのは、恐らく皆無ではないかと思われるのである。中国語の教科書にも、もう少し中国語を身につけるようにするにはどのように編集したらよいか、実用語学を重視するのであれば、安易に会話の教科書を出版するのではなく、真に実用的な視点を取り入れた工夫がなされるべきであろう。会話の教科書で学習してもほとんどの学習者が会話が身につかないのは何故か。筆者には初級中国語の教科書のあり方について、根本的に見直す時期が来ていると思われるのである。

全国的に大学改革が進み、第二外国語もしくは初習外国語の単位が削減されている今日、大学における外国語教育のあり方は根本的に見直されるべきであろう。国際化が進み、外国語教育の重要性が叫ばれているにも関わらず、大学における外国語の単位が削減されるのは何故か。それは語学教育に対する無理解もさることながら、今までの外国語教育が、実用面という面においては、期待されるほどには効果が上がっていないということも一因になっていよう。教科書、教授法、成績評価、明確な目標設定等、外国語教育について、少なくとも中国語教育については全面的に検討し直す時機にあると考える。

3・2 初級には初級用の文法項目がある。従って、一般的に言えば、初級用の教科書にはこれら文法項目をなるべく網羅的に扱うのが理想的であろう。しかし中国語は、非文法的言語、文脈依存の言語、語彙的言語と言われているように、その本質は、ある有意味の単位とある有意味の単位の結びつきにある。このような言語にあっては、文法項目をなるべく多く取り入れることももちろ

ん大切であるが、それよりも同類の表現をなるべくたくさん提供した方が、理解しやすく、身につけやすく、中国語に対する語感を養うこともできる。そのためにはたとえば、中級はただ難易度を上げた文章や会話にするのではなく、文法事項のたとえ初級で取り上げるものであっても、より詳しく一段と深く理解できるように編集することも同様に大切である。

小稿は直接中国語の問題を扱うものではない。従って今回は、中国で使用されている日本語の教科書を参考にして、日本で出版使用されている中国語の教科書についての問題点を指摘するに止めておく。中国語教科書の全体的な問題点、また教科書はどうあるべきであるかについては、いずれ稿を改めて論じたいと思う。